

第6学年C組 音楽科学習指導案

授業者
研究協力者

大山 光子
吉澤 恭子、川辺 茜

1 題材名 思いを歌声に ～6Cぼくらの日々～

2 子どもと題材

(1) 子どもについて

これまでの歌唱表現の学習において、かけ合いや音の重なりのある二部合唱や、曲の盛り上がりを見付けながら曲の感じに合った歌い方の工夫などを経験してきており、声を合わせて歌うことに意欲的である。「歌が好きだから」と、友だちの前で得意な歌を披露する子どももあり、聴き手に対して自分の思いが伝わるように歌いたいという子どもも見られる。また、楽譜から音楽記号に注目して歌うことや、歌詞の内容や曲想に合った表現をするよさを感じ始めている子どもも多い。

その一方で、合唱したいという気持ちはあるものの、「他のパートにつられてしまう」「自信をもって歌えない」「声量が足りない」など、よりよい表現にするためにはどうしたらよいのか、見通しをもつことができない子どもも見られる。そこで、仲間と試行錯誤しながら、ひとつの歌（合唱）をつくり上げていく過程で、自分たちの歌声に自信をもってよりよく表現しようとする姿を期待する。

(2) 題材について

本題材で取り上げる教材曲「ぼくらの日々」は、ハ長調、4/4拍子、二部合唱の曲である。これまで一緒に過ごしてきた友だちのことを大切に想う気持ちが歌詞に表れているため、歌詞の内容と今の自分たちを重ね合わせることができ、共感できる部分があると考えられる。また、子どもたちにとって歌いやすい音域であることから、無理のない発声で歌うことができるとともに、なだらかな起伏の旋律で構成されているため、口ずさみやすく覚えやすい曲である。

二部合唱の部分では、和音の響きや音の重なり方など、曲の仕組みや特徴に着目することで、曲の感じを生かした表現を工夫することができる。音の重なりや音色（声色）、音楽の縦と横の関係を意識しながら、自分たちらしく表現する姿が期待できる題材となっている。

(3) 指導について

本題材では、**曲想と音楽の構造との関わりを理解し、曲の特徴にふさわしい表現を工夫しながら、よりよい音楽表現を目指し、思いをもって歌う**という資質・能力を高めることを目指す。みんなで声を合わせて歌う活動の中で、楽譜から読み取ったことを自分たちなりに解釈して表現の工夫へとつなげるとともに、歌詞の言葉を大切に扱うことで、どのような思いをもって表現していくのかに迫りたい。

授業デザインの取組一つ目との関連から、よりよい表現を目指し、表現力の向上につながるように、自分にとってのモデルを見付け表現に取り入れる場を協働する学びの中に設定する。曲との出会いの場面では、作詞者からのメッセージ映像を視聴し、歌詞の内容と今の自分たちの姿を重ね合わせながら、曲のイメージを思い描く活動を取り入れる。作詞者の曲に対する思いが、子どもたちにとって一つのモデルとなる。また、先輩たちが歌った動画を視聴する場を設定することで、「こうなりたい」という憧れを抱くとともに、自分たちが思い描く合唱をつくり上げていきたいという意欲の高まりにつなげていきたい。さらに、中学生の先輩たちをゲストティーチャーとして招き、よりよい表現のための歌い方のポイントを助言してもらったり、その場で実際にモデルを示してもらったりする。その際は、表現の技術的なことだけではなく、歌を歌うときに大切にしていることや「聴き手」に伝えるために気を付けていることなどにも触れることで、心情面での高まりも期待したい。

授業デザインの取組二つ目との関連から、根拠をもって互いの音楽表現のよさを認め合うことができるように、「演奏者」「聴き手」になり助言し合える場を設定する。合唱をつくり上げる段階では、「こう表現したい」という思いが相手に伝わっているかなど、お互いのよさを確かめることができるように「演奏者」「聴き手」の両者になって方向性を定める活動を取り入れる。「演奏者」として伝えたいことが、「聴き手」にどのように届いているのか、お互い体験することでよりよい合唱をつくり上げることができると思う。

3 題材の目標〈記号は本校の資質・能力表による〉

- (1) 曲想と音楽の構造との関わりについて理解するとともに、各声部の歌声や全体の響き、伴奏を聴き、周囲と調和しながら歌うことができる。〈A-6・15〉
- (2) 自分なりにどのように歌いたいのか思いや意図をもち、音の重なりや強弱に着目し、曲の特徴にふさわしい表現を工夫しようとする。〈A-3〉
- (3) 音や声の重なりへの興味・関心を、よりよい音楽表現につなげるために、自分なりの目標をもち、互いに支え合いながら音楽活動しようとする。〈イ・オ〉

4 題材の構想（総時数 5 時間）

曲の感じに合わせて
歌詞やせん律のもつリズムや流れを生かして歌う。

本題材

時間	学習活動 (・は予想される子どもの姿)	教師の主な支援	評価 (本校の資質・能力との関連)
1	(1)「ぼくらの日々」を聴き、曲の特徴を捉え、楽譜から分かることを読み解き、イメージを共有する。 ・自分たちにぴったりの歌詞だ。 ・卒業式の歌みたい。 ・ブレスの位置でまとまりをつくると、フレーズ感が分かるよ。 ・斉唱もいいけど、やっぱり合唱がすてきな響きになるね。	・曲のイメージを思い描くことができるように、作詞者からのメッセージ映像の視聴や、歌詞を声に出して読む場を設ける。 ・よりよく合唱したいという気持ちを高めたり、憧れをもったりすることができるように、先輩たちが歌った動画を視聴する場を設定する。	・曲の特徴を理解し、どのように歌いたいのか思いをもっている。 〈A-3〉 ・曲想と音楽のつくりとの関わりについて理解している。 〈A-6〉
学習課題 自分たちでつくる「ぼくらの日々」を歌おう。			
2・3	(2)「ぼくらの日々」の上声部下声部を歌う。 ・声が出しやすい音の高さだけど地声にならないようにしよう。 ・主旋律が途中から下パートになるから、声量のバランスに気を付けなくちゃいけないな。	・フレーズ感を大切にして歌うことができるように、曲のつくりを確認しながら歌う場面を設定する。 ・各パートの役割を意識しながら音の重なりに気を付けて歌うことができるように、主旋律やオブリガートの部分を楽譜で確認するよう助言する。	・曲想と音楽のつくりとの関わりについて理解して歌っている。 〈A-6〉 ・音の重なりや和音の響きに着目し、曲の特徴にふさわしい表現を工夫して歌っている。 〈イ・オ・A-3〉
4 本時	(3)「ぼくらの日々」の後半部分のつくりのポイントをしぼって歌う。 (4) 6Cの「ぼくらの日々」を合唱する。 ・歌詞の最後が繰り返されているのには意味があるから、丁寧な歌い方にしよう。 ・「うれしくて」という歌詞は、温かみのある声で歌えるといいな。 ・隣にいる友だちのことを考えながら歌うといいかもしれない。 ・聴いてくれる人に思いが伝わるように歌えたらいいな。	・自分の役割を意識し、それぞれの技能を高めることができるように、少人数でのアンサンブル活動を取り入れる。 ・自分たちが目指す表現のヒントになるように、ゲストティーチャーの範唱を聴いたり、歌い方のポイントを助言してもらったりする場を設ける。 ・自分たちが目指す表現に近づいているかを確認することができるように、強弱や音の重なり、反復と変化などに照らして聴き合い、よさや課題を伝え合う活動を設定する。	・曲の特徴に着目して、音楽的な根拠と自分たちの思いを関連付けながら、強弱や音の重なり、反復と変化などの表現を工夫して歌っている。 〈オ・A-3・6〉
5	(5)「ぼくらの日々」を合唱し、聴き合う。 ・6Cの演奏は、強弱がはっきりしているから、聴いていて心地いいな。	・聴き手のことを意識して歌い、互いの表現のよさを実感することができるように、学年音楽の場を設定し、各学級の合唱を聴き合う活動を取り入れる。	・曲の特徴にふさわしい表現を工夫し、各声部の歌声や全体の響きを聴いて歌っている。 〈イ・A-3・15〉

◎本題材で育む主な資質・能力

曲想と音楽の構造との関わりを理解し、曲の特徴にふさわしい表現を工夫しながら、よりよい表現を目指し、思いをもって歌う。(イ・オ・A-3・6・15)

ひびき合いを生かして
せん律の動きや音の重なりを聴き合って演奏する。

5 本時の実際（4／5）

- (1) ねらい 強弱や音の重なり、反復と変化に着目し、楽譜から読み取ったことと自分たちの思いを関連付ける活動を通して、自分たちの表現を工夫して歌うことができる。
〈オ・A-3・6〉

(2) 展開

○自律的に学習を進めるための支援

時間	学習活動	教師の支援 評 価
5 分	① 学習課題を確認する。	・自分たちの目指す表現の方向性を確かめることができるように、前時までの到達度を振り返る場を設定する。
	学習課題 自分たちの思いを重ねて「ぼくらの日々」を合唱しよう。	
35 分	② 自分たちの表現を目指して合唱する。 全体 ↓ グループ（ゲストティーチャー） ↓ 全体（聴き合う・歌い直す） <予想される子どもの反応> 【自分のパートの音がよく分からず歌えない】 ・一人だと不安だな。自信ないな。 ・自分の声（音）は合っているのかな。 ・やっぱり上のパートが歌いやすいかもしれない。 【自分のパートだけでなら歌える】 ・歌詞も旋律もしっかりと覚えたから大丈夫。 ・上のパートにつられてしまうな。 ・ここは、下のパートが主旋律だな。 【楽譜の通りに表現したいけどうまくできない】 ・クレッシェンドがあるけど、どう歌ったらいいのかわからない。 ・ブレスの前の音が短くなってしまう。 【楽譜の通りに表現している】 ・きれいに声が重なっているのかな。 ・上下パートには、それぞれ役割があるみたいだから、歌い方を変えたらいいのかな。 【思いを重ねて表現している】 ・曲の盛り上がりは、フォルテにしてははっきりと伝えたいな。 ・ぼくは、「言葉」の意味をしっかりと伝えたいから、語頭をはっきり発音して歌ってみよう。 ・私は「君がいること」という歌詞を一番伝えたいから、弱から強への変化を強調して歌いたい。 ・自分たちだけの合唱にしたいから、大切な仲間のことを思いながら歌ってみよう。	・自分たちの表現の工夫が意識できるように、「声のひびき」「言葉」「音楽にこめられた思い」「音楽に託したい思い」など、合唱のポイントを掲示しておく。 ・活動の中で一緒に歌ったり、アドバイスをしてもらったりするゲストティーチャーを紹介する。 ・ゲストティーチャーの範唱から、表現の工夫のヒントが見付けられたかを問い掛ける。 ○自分たちが目指す表現について「こんなふうに歌いたい」という思いと音楽的な根拠を関連付けて伝え合う場面を設定した上で試して歌う活動に入る。 ○自分たちが目指す表現に近付いているかを確かめることができるように、強弱や音の重なり、反復と変化などに照らして聴き合い、よさや課題を伝え合う活動を設定する。 ○聴き合ったことを基に、自分たちの表現をより工夫することができるように、視点を明確にして歌い直す場を設定する。 曲の特徴に着目して、音楽的な根拠と自分たちの思いを関連付けながら、強弱や音の重なり、反復と変化などの表現を工夫して歌っている。 〈オ・A-3・6〉 （歌っている様子・歌声・発言）
5 分	③ 学習を振り返る。 ・「今日という日がぼくらの心をつないでる」の繰り返しの歌い方が聴かせどころになるね。 ・聴き手に伝えるのって、難しいんだな。	・自分たちの表現のよさを実感したり、次時の課題を確認したりすることができるように、歌い直したことを基に振り返る場を設定する。

令和7年度 音楽科実践・研究計画

部 員	○大山光子、奥田瑞季
-----	------------

1 昨年度の成果と課題

昨年度の実践を通して、音楽科における自律した学習者の姿が見えてきた。

- ① 5年「民ようお国めぐり～秋田の民よう～」の実践では、試行錯誤しながら、よりよい表現を目指す子どもを支えるための学びとしてゲストティーチャーの活用を取り入れた。「日本の音楽」民謡に取り組むにあたり、プロの民謡歌手として活動している方々をゲストティーチャーとして迎えた。CDや動画などでは味わうことのできない本物の迫力のある演奏を体感・体験したり、これまでの学びで蓄積してきた音楽的な力を引き出しながら学んだりすることができた。モデルを真似ることを動機付けとし、自分たちなりに「民謡らしい歌い方」を解釈して、課題を見いだしたり考えたりしながら活動したことが一人一人の達成感や成就感につながった。題材計画の中にプロの方の生演奏を2回入れたことは、子どもたちの技能と意欲を高める面で効果的であった。自分たちの学びだけではどうしても解決できない課題を、ゲストティーチャーに質問したり、一緒に歌っていただいたりしたことで答えを見付ける姿が見られた。「民謡とは、きれいな声というよりも迫力のある声だと分かった。声を出してはみたけれど、やっぱり迫力のある声には届かなかった。自分も民謡を受け継いでいる人みたいに迫力のある声を出したい。」「民謡は、合唱と違う歌い方で思ったより難しく感じた。でも、伸びやかな歌声は聴いていて気持ちよかった。自分もそんな歌声を届けたい。」「本物の方にまた来てもらって分かったが、まだまだ声量もないし節回しも下手なので、レベルアップできることが分かった」という子どもの振り返りにも成果が表れていた。

このように、ゲストティーチャーによる生演奏が学ぶ意欲の向上に大きくつながることが明らかになった。ゲストティーチャーの活用は、よりよい表現を目指す子どもたちにとって明確な道しるべとなり有効である。また、活用するタイミングが大切であると考えます。

- ① 3年次の実践では、よりよい音楽表現を目指し、表現力の向上につながるように、音楽活動の中で自分にとってのモデルを見付け、表現に取り入れることを重点としてきた。5年生の実践では、2つのレベルのモデル（プロ・仲間）の設定が「学びのものさし」を働かせる手立てとなった。プロの方と一緒に歌っていただいて節回しや拍のコツをつかみ、技能が高まったところで各グループの発表。そして、よい点や成長した点を見取って伝え合う中で、「お互いのよい点を取り入れたい」「身近なモデルにも近付きたい」という思いにつながっていった。また、「演奏者」「聴き手」になり演奏したり聴き合ったりする活動では、自己と他者の演奏を比較しながら、根拠をもって感想を発言できるように、「聴き手」の聴く視点を「声の出し方」「節回し」と明確にしたことで、表現のよさを認め合う姿も見られた。この活動を通して、仲間のよさや真似してみたい点（自分にとってのモデル）を見付けることができたのである。さらに、学んだことを生かし「民謡」を学習発表会でたくさんの方々に披露できたことが、学んだことの意味や価値を自覚するとともに、達成感や成就感を味わうことにつながった。

これらの手立てが連動し、子どもたち一人一人が民謡らしさを意識し、みんなで作り上げるよりよい表現を追究できていたのではないかと考える。

2 音楽科における自律した学習者の姿

- | | | |
|--|---|--|
| <p>① 「音楽のもと」に目を向けながら、自らの音楽表現をよりよいものにしようとする姿</p> <p>② 感受と知覚の両方を働かせ、思いをもって音楽と関わり、仲間と表現することで、人とのつながりを大切にする姿</p> |  | |
|--|---|--|

3 授業デザインの具体的な取組

- | |
|---|
| <p>○よりよい表現を目指し、表現力の向上につながるように、モデリングによる学びを取り入れる。</p> <p>・本物との出会い ・身近なモデル</p> <p>○根拠をもって互いの音楽表現のよさを認め合うことができるように、「演奏者」「聴き手」になり助言し合える場を設定する。</p> |
|---|

2025年度 「音楽科の資質・能力」表

※ □は、資質・能力の取り扱い学年、■は、定着学年を示す。

		内 容	学習指導要領との関連内容	1年	2年	3年	4年	5年	6年
音楽科の学びに向かう力、人間性等	ア	自分と周囲が奏でる響き合いの美しさ、心地よさを味わいながら、優しい気持ちで演奏しようとする。	A (1) ウ A (2) ウ	□	□	■	■	■	■
	イ	パートの重なりが作り出す音の重なり の美しさに気づき、互いのバランスを考 えながら演奏しようとする。	A (1) ウ A (2) ウ		□	□	□	■	■
	ウ	音を音楽にしていくことに関心をもち、 進んでつくる活動にかかわろうとする。	A (3) ウ	□	□	□	■	■	■
	エ	様々なジャンルの楽曲に関心をもち、進 んで聴こうとする。	B (1)	□	□	■	■	■	■
	オ	よりよい音楽表現を目指して、課題解決 のために、自分なりの目標をもち、互いに 支え合いながら音楽活動をしようとする。	A・B	□	□	□	■	■	■

音楽科の 各領域の 付けたい力 A表現	歌唱の活動								
	1	曲想を感じ取って表現を工夫し、どのよう に歌いたいのか、思いをもって歌う。	1・2 A (1) 7	□	■	■	■	■	■
	2	曲の特徴を捉えた表現を工夫し、どのよう に歌いたいのか、思いや意図をもって 歌う。	3・4 A (1) 7			□	■	■	■
	3	曲の特徴にふさわしい表現を工夫し、ど のように歌いたいのか、思いや意図をも って歌う。	5・6 A (1) 7					□	■
	4	曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わり に気付いて歌う。	1・2 A (1) イ	□	■	■	■	■	■
	5	曲想と音楽の構造や曲想と歌詞の内容との 関わりに気付いて歌う。	3・4 A (1) イ			□	■	■	■
	6	曲想と音楽の構造や曲想と歌詞の内容との 関わりを理解して歌う。	5・6 A (1) イ					□	■
	7	範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり 暗唱したりする。	1・2 A (1) ウ (7)	□	■	■	■	■	■
	8	範唱を聴いたり、ハ長調の楽譜を見たり して歌う。	3・4 A (1) ウ (7)			□	■	■	■
	9	範唱を聴いたり、ハ長調やイ短調の楽譜 を見たりして歌う。	5・6 A (1) ウ (7)					□	■
	10	自分の歌声や発音に気を付けて歌う。	1・2 A (1) ウ (イ)	□	■	■	■	■	■

A 表現

11	呼吸や発音の仕方に気を付けて、自然で無理のない歌い方で歌う。	3・4A (1) ウ (イ)			☐	■	■	■
12	呼吸や発音の仕方に気を付けて、自然で無理のない、響きのある歌い方で歌う。	5・6A (1) ウ (イ)					☐	■
13	互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合わせて歌う。	1・2A (1) ウ (ウ)	☐	■	■	■	■	■
14	互いの歌声や副次的な旋律、伴奏を聴いて、声を合わせて歌う。	3・4A (1) ウ (ウ)			☐	■	■	■
15	各声部の歌声や全体の響き、伴奏を聴いて、声を合わせて歌う。	5・6A (1) ウ (ウ)					☐	■
器楽の活動								
16	曲想を感じ取って表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いをもって演奏する。	1・2A (2) 7	☐	■	■	■	■	■
17	曲の特徴を捉えた表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもって演奏する。	3・4A (2) 7			☐	■	■	■
18	曲の特徴にふさわしい表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもって演奏する。	5・6A (2) 7					☐	■
19	曲想と音楽の構造（リズムや旋律などの特徴）との関わりについて気付く。	1・2A (2) イ (7)	☐	■	■	■	■	■
20	曲想と音楽の構造（リズムや旋律、各声部の役割、曲全体の構成の特徴）との関わりについて気付く。	3・4A (2) イ (7)			☐	■	■	■
21	曲想と音楽の構造（音楽を特徴付けている要素と音楽の仕組みの関係）との関わりについて理解する。	5・6A (2) イ (7)					☐	■
22	楽器の音色のよさや面白さ、演奏の仕方を工夫することで音色が変わることに気付く。（鍵盤ハーモニカなど）	1・2A (2) イ (イ)	☐	■	■	■	■	■
23	楽器がもつ固有の音色や響きのよさ、楽器の演奏の仕方や楽器の組み合わせなどの工夫で音色や響きが変わることに気付く。（リコーダーなど）	3・4A (2) イ (イ)			☐	■	■	■
24	多様な楽器の音色や響きのよさ、演奏の仕方を工夫することで楽器の音色や響きが変わることを、演奏を通して理解する。	5・6A (2) イ (イ)					☐	■
25	範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏する。	1・2A (2) ウ (7)	☐	■	■	■	■	■
26	範奏を聴いたり、ハ長調の楽譜を見たりして演奏する。	3・4A (2) ウ (7)			☐	■	■	■

A 表現

27	範奏を聴いたり、ハ長調やイ短調の楽譜を見たりして演奏する。	5・6A (2) ウ (7)					☐	■
28	身近な楽器に親しみ、音色に気を付けて旋律楽器や打楽器を演奏する。	1・2A (2) ウ (4)	☐	■	■	■	■	■
29	音色や響きに気を付けて、旋律楽器や打楽器を演奏する。	3・4A (2) ウ (4)			☐	■	■	■
30	音色や響きに気を付けて、適切な演奏の仕方 で旋律楽器や打楽器を演奏する。	5・6A (2) ウ (4)					☐	■
31	互いの楽器の音や伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する。	1・2A (2) ウ (ウ)	☐	■	■	■	■	■
32	互いの楽器の音や副次的な旋律、伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する。	3・4A (2) ウ (ウ)			☐	■	■	■
33	各声部の楽器の音や全体の響き、伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する。	5・6A (2) ウ (ウ)					☐	■
音楽づくりの活動								
34	声や身の回りの様々な音に親しみ、その場で様々な音を選んだりつなげたりして音遊びをする。	1・2A (3) ア (7)	☐	■	■	■	■	■
35	見つけた音や工夫した音を使って、その場でいろいろな音を選択したり組み合わせたりして即興的に表現する。	3・4A (3) ア (7) 5・6A (3) ア (7)			☐	■	■	■
36	試しながら音楽をつくる中で、このような音楽をつくりたいという考えをもつことができる。	1・2A (3) ア (4)	☐	■	■	■	■	■
37	試行錯誤しながら音楽をつくる中で、このような音楽を、このように構成してつくりたいという考えをもつことができる。	3・4A (3) ア (4)			☐	■	■	■
38	試行錯誤しながら音楽をつくる中で、全体のまとまりを考えて、このような音楽を、このように全体を構成してつくりたいという考えをもつことができる。	5・6A (3) ア (4)					☐	■
39	声や身の回りの様々な音の特徴が生み出す面白さに気付くことができる。	1・2A (3) イ (7)	☐	■	■	■	■	■
40	いろいろな音の響きや、いくつかの音のひびきを合わせた音の特徴が生み出す面白さに気付くことができる。	3・4A (3) イ (7) 5・6A (3) イ (7)			☐	■	■	■
41	音を組み合わせでつくったリズムパターンや短い旋律を反復させたり、呼びかけ合うようにしたり、変化させたりする面白さに気付くことができる。	1・2A (3) イ (4)	☐	■	■	■	■	■
42	リズムパターンや短い旋律を同時に重ねたり、時間をずらして重ねたりする面白さに気付くことができる。	3・4A (3) イ (4) 5・6A (3) イ (4)			☐	■	■	■

43	決めた条件に基づいて、声や身の回りの様々な音を選んだりつないだりして表現する。	1・2 A (3) ウ (ア)	☐	■	■	■	■	■
44	決めた条件に基づいて、様々な音を即興的に選択したり組み合わせたりして表現する。	3・4 A (3) ウ (ア) 5・6 A (3) ウ (ア)			☐	■	■	■
45	音楽の仕組み（反復、呼びかけとこたえ、変化など）を使って、音を簡単な音楽にしていけることができる。	1・2 A (3) ウ (イ)	☐	■	■	■	■	■
46	音楽の仕組み（反復、呼びかけとこたえ、変化、音楽の縦と横の関係など）を使って、音を音楽へと構成することができる。	3・4 A (3) ウ (イ) 5・6 A (3) ウ (イ)			☐	■	■	■

B鑑賞	1	曲や演奏の楽しさについて考えをもち、曲全体を味わいながら聴く。	1・2 B (1) ア	☐	■	■	■	■	■
	2	曲や演奏のよさなどについて考えをもち、曲全体を味わって聴く。	3・4 B (1) ア			☐	■	■	■
	3	音楽的な根拠に基づいて、曲や演奏のよさなどについて考えをもち、曲全体を味わって聴く。	5・6 B (1) ア					☐	■
	4	曲の雰囲気や表情と音楽を形づくっている要素とのかかわり合いに気付きながら聴く。	1・2 B (1) イ	☐	■	■	■	■	■
	5	曲全体の雰囲気や表情とその移りゆく変化と音楽を形づくっている要素とのかかわり合い（音楽の構造）に気を付けて聴く。	3・4 B (1) イ			☐	■	■	■
	6	曲全体の雰囲気や表情とその移りゆく変化と音楽を形づくっている要素とのかかわり合い（音楽の構造）を理解しながら聴く。	5・6 B (1) イ					☐	■

【共通事項】	1	音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと聞き取ったこととの関わりについて考える。	1～6共通事項 (1) ア	■	■	■	■	■	■
	2	音楽を形づくっている要素及びそれらに関わる音符、休符、記号や用語について、音楽における働きと関わらせて理解する。	1～6共通事項 (1) イ	■	■	■	■	■	■

＜音楽科の学びを支える「見方・考え方」＞

a 【共通事項】の「音楽を形づくっている要素」に着目し、その働きの視点で楽曲を感受し、表現すること。

＜領域の学びを深める「見方・考え方」＞

A表現 b 「音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なり、和音の響き、音階、調、拍、フレーズ」などの音楽を特徴付けている要素に着目し、それらの要素のよさを味わいながら表現する。

c 「反復、呼びかけとこたえ、変化、音楽の縦と横との関係」などの音楽の仕組みに着目し、それらの働きが生み出すよさを感じながら表現する。

B鑑賞 d 楽曲の音楽の構造（音楽を形づくっている要素の表れ方や、音楽を特徴付けている要素と音楽の仕組みとの関わり）に着目し、曲や演奏のよさを見いだし、全体を味わいながら聴く。